

妊娠期から育児期における父親意識と役割行動の獲得に関する文献検討

山崎 晶子¹⁾, 泊 祐子²⁾

キーワード：父親, 父親意識, 役割行動

I. 緒言

父親意識は妻の妊娠期から芽生えるが、男性は妊娠・出産に伴う身体的変化の経験がないために父親になったという自覚は女性に比べて遅く、父親としてのイメージは漠然としている(笹木・村田, 2013)ことが報告されている。親になる移行期といえる妻の妊娠期に父親は、親となる意識をもちにくい状況であり、両親学級等への参加や、家族・友人・メディア等からの育児に関する知識・技術を得る必要がある。子どもが出生後、夫婦と子ども世帯の「育児時間」は女性は男性の2.1～2.7倍程度(男女共同参画局, 2020)で母親の育児負担が大きいことが推察され、育児困難感や育児の孤立の要因の一つと(高橋, 2007; 神崎, 2014)考えられている。このような状況を改善するために、父親の育児参加や育児協力という妻の育児への補佐的な役割に位置付けるよりも、母親と共に育児に取り組む姿勢が求められている。

家族システム論でみると夫婦、親子の関係があり、それらの個システムは互いに関係しあいながらも同時に区別される複数のサブシステムがある。夫婦は子どもの出生により、夫婦二者関係から三者関係の形成が必要となり、家族関係の変化に加えて、家族発達段階の移行に伴う発達課題に取り組まなければならない。

そこで、本研究の目的は、家族の中で父親となる男性に注目し、妊娠期から育児期を通して男性が、父親意識や役割行動を獲得していく過程とその要因を明らかにすることである。これらが明らかになると、男性が父親意識や役割行動を獲得しやすくなるような支援を検討する資料となり得る。

II. 研究方法

1. 対象文献の抽出方法

研究素材となるデータは、2013-2022年の10年間を研究対象とし、日本国内文献を医学中央雑誌web版(Ver.5)とCiNiiを用いて、キーワードを「育児」and「父親」and「意識」and「役割」で検索した。医中誌では42件、CiNiiは39件で合計81件を得た。適格基準は、妊娠期から育児期にある父親を対象としている文献とした。テーマと要約を熟読し、本研究テーマに合致しない(母親に関する記述、会議録、解説・論説、子どもに慢性疾患や障がいがある)文献52件を除外し、さらに重複文献4件を除外し、25件を対象文献とした。なお、本研究では父親意識や役割行動については文化や習慣に影響されることから日本の父親を対象とした。

2. 分析方法

対象文献の全文を熟読し、父親意識の芽生えや役割行動に関する記述と判断できる箇所を抽出した。分析は共同研究者で読み合わせをし、妊娠期・分娩期・育児期の各3時期に分類し、3時期の父親意識の芽生えや役割行動に関して特徴となるテーマごとに整理した。

III. 用語の定義

1. 父親意識：男性の大人が子どもの誕生・成長発達に責任を持つと決意・認識しているさま(宮崎, 1986)。
2. 役割行動：先行研究(高見・佐藤・塩飽, 2009)を参考に、仕事と家庭での役割を受容して、父親として子どもを養育するかかわりや行動とした。

IV. 研究結果

1. 対象文献の分類

表1に対象文献を記載した。文中の丸数字は、表1内に示した分析対象文献の番号の丸数字である。対象文献の研究デザインは、質的研究2件、量的研究14件、混合研究は2件であった(表1)。

受付日 2023年6月16日

採択日 2023年9月29日

1) YAMASAKI Akiko
前 関西福祉大学 看護学部

2) TOMARI Yuko
四天王寺大学大学院 看護学研究科

表1. 分析対象文献一覧

番号	発行年	著者	掲載誌	論文テーマ	研究デザイン
①	2022	荒川亜希子	科学研究費助成事業研究成果報告書, 若手研究B, 研究期間2015-2019.	初めて親となる男性の父親役割獲得を促進する出生前看護介入プログラムの開発	混合
②	2020	船越泉美, 佐々木綾子	日本ウーマンズヘルス学会誌, 18(2), 27-36.	第1子の出産に立ち会った育児中の父親の経験	質的
③	2020	藤田麻央, 朝澤恭子	東京医療保健大学紀要, 15(1), 1-9.	乳幼児期の子どもを持つ男性における父親役割認識の関連要因	量的
④	2020	芳賀亜紀子, 徳武千足, 鮫島敦子, 他	母性衛生, 63(2), 588-596.	第1子妊娠末期から3歳までの夫婦への子育て講座の有用性に関する評価 父親の育児・家事の実態および受講後アンケートからの考察	質的
⑤	2020	佐々木祐希, 大石時子	日本母子看護学会誌, 15(2), 21-35.	就学前の子をもつ父親の家事育児参加に影響する要因の検討	量的
⑥	2020	三加るり子, 松井弘美, 永山くに子	母性衛生, 61(1), 187-194.	初産婦の出産をめぐる夫の準備状態	質的
⑦	2020	山口咲奈枝	科学研究費助成事業研究成果報告書, 基盤研究(C)一般, 研究期間2016-2019.	父親の育児行動を促進する看護介入プログラムの開発 - ランダム化比較試験による検討 -	質的
⑧	2019	相川頌子	生活社会科学研究, 26, 65-73.	仕事に対する意識が家事・育児に与える影響 - 子育て期の父親に着目して -	量的
⑨	2019	福嶋真理, 立崎理香, 齋藤幸子, 他	栃木県母性衛生学会雑誌, とちほ45, 18-22.	父親役割行動の実際と母親の産後うつ病スクリーニング (Whooleyの2項目質問票) の変化	量的
⑩	2019	多喜代健吾, 北宮千秋	日本看護研究学会雑誌, 42(4), 763-773.	父親の育児参加への育児参加要因およびソーシャルサポートの影響	量的
⑪	2019	寺見陽子	ナカニシヤ出版, 135-160, 京都.	現代の父親の親意識と子育て実践: 父親の養育性・役割取得を促す教育プログラムの開発について	質的
⑫	2018	相川頌子	家族関係学, 37, 37-48.	父親の家事・育児役割意識は渡米前後でどのように異なるのか - 海外長期滞在者のインタビュー調査から -	質的
⑬	2018	金澤悠喜, 加納尚美	日本助産学会誌, 32(2), 202-214.	第1子誕生に伴う夫からみた夫婦関係の変化の過程	質的
⑭	2018	前原敬子, 椎葉美千代, 渡辺晴美, 他	母性衛生, 58(4), 640-647.	幼児を持つ父親の養育に影響する要因	量的
⑮	2017	寺見陽子, 南憲治	Journal of the Faculty of Human Sciences, KobeShoin Women's University, 6, 119-135.	父親の家事・育児意識と行動の変容とその要因に関する研究 2000年と2011年のデータ比較を通して	量的
⑯	2016	寺見陽子	科学研究費助成事業研究成果報告書, 基盤研究(C)一般, 研究期間2013-2015.	父親の養育性と役割取得を促す発達教育プログラムの開発	混合
⑰	2016	渡部舞子, 安積陽子	母性衛生, 57(1), 174-182.	妻の妊娠期における夫の抑うつの実態と関連要因	量的
⑱	2015	北原綾, 杉本昌子, 林知里, 他	小児保健研究, 74(5), 630-637.	1歳6ヵ月児をもつ父親の育児行動に関係する要因の検討 6つの育児行動に着目して	量的
⑲	2015	前原敬子, 齋藤ひさ子	日本助産学会誌, 28(2), 144-153.	学童期後期の子供に対する父親の養育の行動と意識に影響する要因	量的
⑳	2015	森永裕美子, 難波峰子, 二宮一枝, 他	岡山県立大学保健福祉学部紀要, 21, 57-65.	育児をとおして父らしくなる折り返しと自覚	質的
㉑	2015	森永裕美子, 難波峰子, 二宮一枝	小児保健研究, 74(4), 519-526.	育児期における父親の親性と母親の育児負担感に関する研究	量的
㉒	2015	高山純子	お茶の水女子大学子ども学研究紀要, 3, 49-60.	食事作りからみる父親の子どもに対する「ケア役割」意識	質的
㉓	2014	澤岨千晶, 小西清美, 長嶺絵里子, 他	沖縄の小児保健, 41, 45-48.	乳幼児を持つ父親の家事・育児への意識と役割行動	量的
㉔	2014	徳武千足, 坂口けさみ, 芳賀亜紀子, 他	長野県母子衛生学会誌, 16, 40-48.	父親の育児家事行動の実態と育児意識および育児参加を促進する要因について	量的
㉕	2013	佐藤淑子	The journal of Kamakura Women's University, 20, 1-10.	育児期家族の生活と心理	量的

2. 妊娠期・分娩期・育児期の父親意識と役割行動の獲得に関する分類

対象文献を概括し、調査時期が妊娠期・分娩期・育児期のいずれかで分類した。3時期に文献を分類したのちに、文献の内容からその特徴を示した(表2)。

1) 妊娠期・分娩期

(1) 父親意識と役割行動の獲得と支援

夫は妻の妊娠期から育児や家事をする主体であるという当事者意識をもっているものの(9)、メンタルヘルスの問題をもつこともあり、妻の妊娠期にある夫の抑うつは長時間労働と関連し、1日の平均労働時間が長いほど抑うつ傾向が高かった(17)。

父親が出生後の父親役割行動を考える契機となる体験にするために、妊娠期に父親としての役割行動を具体的に考えて記述するパタニティポートフォリオを開発した。マタニティをもじったパタニティポートフォリオと名付けたものである。夫婦で産後生活のスケジュール立案や家庭での役割分担チェックリストの作成など取り組む作業を行う教室を開催していた(1)。

また、分娩に向けた準備では夫はサポートをする自覚を持ち、分娩コーチの役割を学んでいた(6)。夫は出産前後の夫婦の協力の認識や妻の家族との良好な関係を構築し、出産に備えた環境調整など、家族の協力関係の形成をしていた(6)。妊娠30週以降の夫婦を対象に、分娩に関する知識の提供やパースプランの記入等の産前の準備教育を実施していた(7)。教室・学級への参加は64.7%、妊婦健診付き添いは77.6%の夫が経験していた(5)。このような出産前後の夫婦への働きかけは夫に父親となる指導として夫婦を単位に行われていた。

(2) 分娩時の夫の気持ち

夫は、状況の変化に伴いアンビバレントな思いを抱いていた。二人で出産を乗り越えて夫婦の絆を強めると感じ、生まれた瞬間に感じた父親としての自覚がある一方で、父親になった実感はなかった(2)。

2) 育児期

(1) 父親の育児に影響する要因

妊婦健診の付き添い経験は休日の家事育児時間を増加させ、教室・学級への参加経験は仕事および休日の家事育児時間についても増加させていた(5)。立ち会い分娩の経験は、夫の生活や仕事に対する意識の変化がみられ、子どもに対する愛情とともに父親であることを実感していた。また、仕事の日家事・育児時間の増加に影響があった(5)。立ち会い出産経験者、出産休暇を取得した父親の方が、育児家事行動得点が有意に高かった(24)。

父親役割認識において、夫婦満足度の良さと労働時間の短さが有意に関連しており、夫婦関係が良いと労働時間が短くなり父親役割認識が高められていた(3)。父親の1週間の労働時間が1週間60時間以上の者は、35時間未満、35～59時間の者に比べて平日の育児参加時間が短くなっていた(10)。1歳6か月児を持つ父親の育児行動では、通勤時間を含めた労働時間が12時間未満の者が、12時間以上の者より有意に週3回以上育児行動を行っていた(18)。2000年と2011年の比較で平日の子どもとかわる時間は、父親も母親も約1時間程度減少し、休日においても子どもとかわる時間は、父親は2時間、母親は1.6時間減少していた。家事・育児参画に対する父親の自己評価は2000年も2011年も変化はなかったが、母親からみた父親の役割評価は低下していた(15)。夫の在宅時間が増えると、妻の補佐程度だった家事・育児の遂行が、夫婦の協働へと移行していた(12)。

父親の主導権意識(固定的な役割分担意識)が高くなると、平日の育児参加時間は短くなっていた(10)。父親の仕事に対する意識が強いほど育児頻度が高かったが、20～30歳代と40～60歳代の父親を比較すると、40～60歳代の方が父親の意識が高いほど育児頻度が少なかった(8)。新しい家族が増える際に、父親は家族の役割調整を考えていると回答したのは9割、家事・育児について話し合ったのは8割であった(23)。

父親自身の父と母との関係が親和的であれば、父親は安定的愛着を示し、「育児に対する自信」があり、その

表2. 妊娠期・分娩期・育児期の3時期における父親意識と役割行動の獲得に関する分類

時期	特徴	該当文献番号
妊娠期・分娩期	父親意識と役割行動の獲得と支援	①⑤⑥⑦⑨⑰
	分娩時の夫の気持ち	②
育児期	父親の育児に影響する要因	③④⑤⑧⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑲⑳㉑㉒
	自己のアイデンティティへの父親意識の統合	⑬⑳㉑㉒

自信が「育児行動」につながっていた(16)。家族への責任、父と子どもとの関わりから父として役割を遂行すること、子どもの直接的反応への感情や子どもへの慈しみから父としての実感を得ていた(20)。父親の「養育性」は「夫婦関係」および「支援希求(相談)」から「育児行動」を誘発し役割意識が高まっていた(16)。父親の養育行動・養育意識に最も影響する要因は肯定的親役割受容であった(14)。父親の養育行動と意識に与える要因の影響は、行動に関しては「夫婦関係満足度」「肯定的親役割受容感」の順に高く、意識に関しては「夫婦関係満足度」「肯定的親役割受容感」「性役割観」の順に高かった(19)。父親は夫婦関係が良いと育児参加する傾向があり、夫婦関係の良い方が子育て否定感が低かった(25)。

育児について啓発した介入群では育児が多く実施され、生後1か月時にうつ病スクリーニング陰性の割合が多かった(9)。妊娠末期から子どもが3歳になるまで父親を対象とした子育て講座に参加した父親の評価では、講座受講群の父親の方が「夫婦2人で育児をしている」意識が対照群より高かった。また、父親にとって父親同士の交流が情報交換の良い機会になっていた(4)。父子の関わりを深める体験型プログラムでは、家族関係が見えてきたことや夫婦関係の見直しにつながっていた(11)。

(2) 自己のアイデンティティへの父親意識の統合

夫婦関係の変化には夫婦共通の目標を決め、妻のサポートをする役割の追加、夫婦関係のバランスを保つ工夫や再調整、親になるお互いを受容、責任感の芽生えによる家族意識の向上があった(13)。父親が仕事か、育児か、優先順位の迷いといった葛藤を味わうが、家事・育児に対する考えが母親と異なっても母親に配慮し、父親自身が折り合いをつけていた(20)。父親の親性は、夫婦の関係性、父親としての自覚、児への親愛性の3因子であった(21)。父親が家族に食事を作ることにより、自分中心から家族の状況に配慮した誰かを思いやる視点に移行し、家族からの承認が「ケア役割」を内面化していった(22)。

V. 考察

1. 父親意識と役割行動の変化と支援

父親意識や育児行動に与える要因には、夫婦関係や肯定的親役割の受容および古典的な性役割意識や感情であった。つまり、夫婦関係が良いと親役割意識や行動は

習得されやすいといえる。

一方、父親意識と役割行動の獲得を促進する支援は、妊娠期・分娩期における集団指導の働きかけであった。一つには夫婦単位で取り組む体験型の教室や、妊婦健診の付き添い時に胎児の成長を超音波の画像で視ることで、妻の妊娠による身体的変化を疑似体験する(小林, 2002)などであった。二つ目には、父親に直接的に働きかけるパタニティポートフォリオであった。加えて、専門職からの保健指導は夫婦で妊娠期から父親意識や役割行動を獲得していくために重要な支援であることが確認されたと考える。

2. 男性の自己のアイデンティティに父親意識を統合するまでのゆらぎ

妻の妊娠期に夫は、夫自身の身体の変化がないために親になることを実感にしくいと言われている。男性が身体的には体験できない妊娠や出産といった妻が体験することを男性は頭で理解しなければならない。妊娠中の両親学級等で共有した出産後の生活のイメージや育児技術の経験とは異なる妻とのズレを感じる父親の戸惑いや、出産時に立ち会った体験で生じるアンビバレントな気持ち、男性の自己のアイデンティティに父親意識を統合するまでのゆらぎになっているのではないかと考える。

このゆらぎは、木越ら(2006)が周産期における夫の父親役割獲得プロセスの6つの段階で説明している5段階目の「父母の相違を認める」だと考える。「父母の相違を認める」は、つわり体験の実感のなさなど〈体感できない自己の限界〉を認めることであり、そこに至ると〈自分の父親役割を認め(る)〉、父親役割行動が具体化する述べている。つまり、「父母の相違を認める」ことで男性が父親意識を自己のアイデンティティに統合できると考えられる。

3. 支援に重点を置く父親の要因

父親意識と育児の頻度では、父親意識が高いほど育児頻度も高いが、父親の年代が高い方が低い方に比べて育児頻度が少なくなっていた。父親の年代が高くなるほど経済的役割意識が強くなると考えることもできる。労働時間は夫の抑うつ傾向と関連しており(17)、父親意識と役割行動の獲得のためには父親のメンタルヘルスと労働時間には配慮が必要である。

4. 研究の限界と今後の課題

本研究は文献研究法を用いたので、データとした文献の父親意識と役割行動に関連する概念は、父親の育児行動、役割意識、役割観など類似用語が多かったため、類似用語の含まれる各文献の意味を忠実に拾ったが、十分な記述がない場合もあり文献研究の限界と考える。しかし、本研究の用語の定義に従い真実性の担保を行った。

本研究結果では、妊娠期から育児期を通して親となる男性の父親意識と役割行動を獲得していく過程と関連する要因が明らかとなった。今後の課題として、夫婦が共同して育児に取り組む要因を明らかにする必要があると考える。

VI. 結論

1. 父親意識や役割行動の獲得には、夫婦関係の良好さや肯定的親役割の受容および、妊婦健診の同行、出産前の準備教育の参加、出産の立ち会い経験など妻と共同することが影響していた。
2. 父親意識と役割行動の獲得のために支援の際に着目する点は、父親の年代やメンタルヘルスが挙げられた。

利益相反

本研究における利益相反は存在しない。

引用文献

- 1) 相川頌子 (2018) : 父親の家事・育児役割意識は渡米前後でどのように異なるのかー海外長期滞在者のインタビュー調査からー, 家族関係学, 37, 37-48.
- 2) 相川頌子 (2019) : 仕事に対する意識が家事・育児に与える影響ー子育て期の父親に着目してー, 生活社会科学研究, 26, 65-73.
- 3) 荒川亜希子 (2022) : 初めて親となる男性の父親役割獲得を促進する出生前看護介入プログラムの開発, 科学研究費助成事業研究成果報告書, 若手研究B, 研究期間2015-2019.
- 4) 男女共同参画局 (2020) : 「共同参画」2020年9月号, 「家事・育児・介護」と「仕事」のバランスー個人は, 家庭は, 社会はどう向き合っていくかー令和2年版男女共同参画白書からー共働き世帯の増加, https://www.gender.go.jp/public/kyodosankaku/2020/202009/202009_02.html. (検索日 2023-02-09)
- 5) 芳賀亜紀子, 徳武千足, 鮫島敦子, 他 (2020) : 第1子妊娠末期から3歳まで夫婦への子育て講座の有用性に関

する評価 父親の育児・家事の実態および受講後アンケートからの考察, 母性衛生, 63(2), 588-596.

- 6) 金澤悠喜, 加納尚美 (2018) : 第1子誕生に伴う夫からみた夫婦関係の変化の過程, 日本助産学会誌, 32(2), 202-214.
- 7) 神崎光子 (2014) : 産後1カ月の母親の育児困難感とその他の育児上の問題, 家族機能との因果関連, 女性心身医学, 19(2), 176-188.
- 8) 木越郁恵, 泊祐子 (2006) : 周産期における夫の父親役割獲得プロセス, 家族看護学研究, 12(1), 32-38.
- 9) 北原綾, 杉本昌子, 林知里, 他 (2015) : 1歳6ヵ月児をもつ父親の育児行に關係する要因の検討 6つの育児行動に着目して, 小児保健研究, 74(5), 630-637.
- 10) 小林益江 (2002) : 妻の妊娠期からの父親準備ー胎児画像・胎動とジェンダー特性からー, 母性衛生, 43(2), 274-282.
- 11) 前原敬子, 椎葉美千代, 渡辺晴美, 他 (2018) : 幼児を持つ父親の養育に影響する要因, 母性衛生, 58(4), 640-647.
- 12) 前原敬子, 齋藤ひさ子 (2015) : 学童期後期の子供に対する父親の養育の行動と意識に影響する要因, 日本助産学会誌, 28(2), 144-153.
- 13) 宮崎叶 (1986) : 母性・父性に関する研究, 日本総合愛育研究所紀要, 22, 23-24.
- 14) 森永裕美子, 難波峰子, 二宮一枝 (2015) : 育児期における父親の親性と母親の育児負担感に関する研究小児保健研究, 74(4), 519-526.
- 15) 森永裕美子, 難波峰子, 二宮一枝, 他 (2015) : 育児をとおして父らしくなる折り合いと自覚, 岡山県立大学保健福祉学部紀要, 21, 57-65.
- 16) 三加るり子, 松井弘美, 永山くに子 (2020) : 初産婦の出産をめぐる夫の準備状態, 母性衛生, 61(1), 187-194.
- 17) 佐々木祐希, 大石時子 (2020) : 就学前の子をもつ父親の家事育児参加に影響する要因の検討, 日本母子看護学会誌, 15(2), 21-35.
- 18) 笹木葉子, 村田亜紀子 (2013) : 初妊婦の母親像とその夫の父親像ー質問紙の自由回答からー, 北海道文教大学研究紀要, 37, 169-176.
- 19) 佐藤淑子 (2013) : 育児期家族の生活と心理, The journal of Kamakura Women's University, 20, 1-10.
- 20) 澤岬千晶, 小西清美, 長嶺絵里子, 他 (2014) : 乳幼児を持つ父親の家事・育児への意識と役割行動, 沖縄の小児保健, 41, 45-48.

- 21) 高橋有里 (2007) : 乳児の母親の育児ストレス状況とその関連要因, 岩手県立大学看護学部紀要, 9, 31-41.
- 22) 高見美奈, 佐藤幸子, 塩飽仁 (2009) : 親の役割と親役割行動が子どもの評価する家族機能と精神的健康に与える影響, 日本看護研究学会誌, 2, 55-63.
- 23) 高山純子 (2015) : 食事作りからみる父親の子どもに対する「ケア役割」意識, お茶の水女子大学子ども学研究紀要, 3, 49-60.
- 24) 多喜代健吾, 北宮千秋 (2019) : 父親の育児参加への育児参加要因およびソーシャルサポートの影響, 日本看護研究学会雑誌, 42(4), 763-773.
- 25) 寺見陽子 (2016) : 父親の養育性と役割取得を促す発達教育プログラムの開発, 科学研究費助成事業研究成果報告書, 基盤研究 (C) 一般, 研究期間2013-2015.
- 26) 寺見陽子 (2019) : 現代の父親の親意識と子育て実践 : 父親の養育性・役割取得を促す教育プログラムの開発について, ナカニシヤ出版, 135-160, 京都.
- 27) 寺見陽子, 南憲治 (2017) : 父親の家事・育児意識と行動の変容とその要因に関する研究 2000年と2011年のデータ比較を通して, Journal of the Faculty of Human Sciences, KobeShoin Women's University, 6, 119-135.
- 28) 徳武千足, 坂口けさみ, 芳賀亜紀子, 他 (2014) : 父親の育児家事行動の実態と育児意識および育児参加を促進する要因について, 長野県母子衛生学会誌, 16, 40-48.
- 29) 藤田麻央, 朝澤恭子 (2020) : 乳幼児期の子どもを持つ男性における父親役割認識の関連要因, 東京医療保健大学紀要, 15(1), 1-9.
- 30) 船越泉美, 佐々木綾子 (2020) : 第1子の出産に立ち会った育児中の父親の経験, 日本ウーマンズヘルス学会誌, 18(2), 27-36.
- 31) 福嶋真理, 立崎理香, 齋藤幸子, 他 (2019) : 父親役割行動の実際と母親の産後うつ病スクリーニング(Whooleyの2項目質問票)の変化, 栃木県母性衛生学会雑誌, 45, 18-22.
- 32) 渡部舞子, 安積陽子 (2016) : 妻の妊娠期における夫の抑うつの実態と関連要因, 母性衛生, 57(1), 174-182.
- 33) 山口咲奈枝 (2020) : 父親の育児行動を促進する看護介入プログラムの開発-ランダム化比較試験による検討-, 科学研究費助成事業研究成果報告書, 基盤研究 (C) 一般, 研究期間2016-2019.